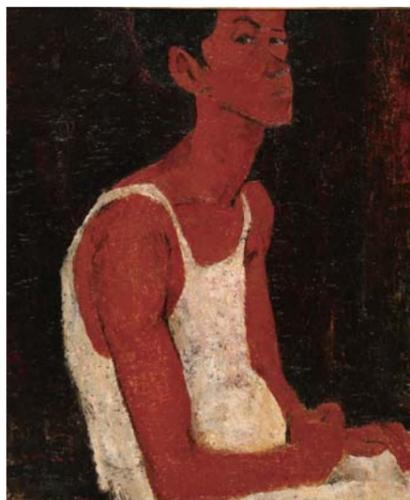
香美市立美術館

アートの窓

香美市立美術館は、平成6年に土佐山田町立美術館として誕生し、今年で20周年を迎えます。この節目にこれまでの歩みを振り返り、**香美市立美術館開館20周年記念展**を開催します。まずは『前期』として、オープンから10年間の足跡を振り返りたいと思います。

ふるさとの美術館として歩みを始めた土佐山田町立美術館の、第1回の展覧会は、高知に縁のある画家『平賀亀祐　洋画展』でした。オープニングセレモニーには多くの方々が集まり、盛大に美術館のオープンを祝いました。

その後、高知県や土佐山田町に関係のある方々の展覧会を次々に企画していきました。

一方で、美術館の収蔵作品も徐々に整ってきて、平成8年には、初めての収蔵品展が開催されるほどになりました。それは、全くのゼロからスタートしたコレクションが、少しずつ形になってきた証しでした。そこには、土佐山田町内外から寄せられた多くの方々からの援助がありました。たくさんの好意の積み重ねにより、創生期の困難を乗り越えることができたのだと思います。

このような前期10年間の歩みを『人・ひと・人』展として開催します。この美術館が、多くの人たちとのつながりで支えられてきたことを感じてもらえる展覧会です。また、これに合わせて、香美市民の皆さんから、『ひと』をテーマに作品を募集しました。応募された約20名の方々の絵画や写真などの作品も、収蔵品とともに展示しています。

旧土佐山田町に生まれた、この美術館の歴史を、多くの方々にご覧いただきたいと思います。

（館長・都築房子）

香美市立美術館 開館20周年記念展 前期

― 人・ひと・人 ―

8月30日（土）～9月21日（日）

▲自画像／片木太郎

香美市立美術館

ロゴマーク決定

香美市立美術館20周年に合わせ、ロゴマークを募集したところ、105点のご応募をいただきました。ご応募いただいた皆さま、ありがとうございました。

厳正な審査の結果、ロゴマークは、次のとおり決定しました。

【制作者】

オダ タクミさん

京都府（土佐山田町出身）

【デザイン意図】

香美（Kami）市のKと美術館（Museum）のMを図案化しました。

香美市を囲む山々の中に建つ美術館の姿をイメージし、美術館が将来に向かって飛躍していく光を表現しました。また同時に、香美市の人たちの感性が、アートに触れることで空高く飛躍する様子もイメージしています。

色は新緑を思わせる若草色。香美市の自然を思わせる色であり、これまでの20年間の歴史を踏まえて、これからも新たな芽（アート作品や才能）を生み出していってほしいという思いを表しました。また「美術やアートは敷居が高い」と考えている方にも、気軽に美術館に訪れていただけるような、親しみやすい優しい色でもあります。

▲決定したロゴマーク

図書館だより

市立図書館

◆敬老の日　読書のすすめ

今月15日の敬老の日前後の2週間、高齢者向けの本のコーナーを設けています。日頃、本に親しんでいる人はもちろん、ほとんど読んでない人も、ぜひ本に親しんでみましょう。日頃の忙しさを少し忘れて、自分だけの時間を過ごすのもいいものです。同時に、夏の暑さから心や身体をいたわる健康の本も展示しています。ぜひご覧ください。

▽**海賊とよばれた男**（百田尚樹 著）▽**abさんご**（黒田夏子 著）▽**等伯**（安部龍太郎 著）▽**わりなき恋**（岸恵子 著）▽**夏バテ51の対策**（福田千晶 著）▽**それでもわが家から逝きたい**（沖藤典子 著）▽**加工食品には秘密がある**（メラニー・ウォーナー 著）▽**もっと知りたい食物アレルギーとアナフィラキシー**（角田和彦 著）▽**薬膳ごはん**（杏仁美友 著）▽**元気回復足もみ力**（近澤愛沙 著）

◆子ども司書養成講座

教育委員会では、子どもたちが将来、地域の図書館司書や読書ボランティアとして活躍してくれるように、子ども司書養成講座を開催しています。

8月の基礎講座では、本のすばらしさや読書の大切さを学びました。また、香北町出身の故やなせたかし先生について、その功績や、作品に込められた思いについて考えました。

9月からは公立図書館や学校で実技・実地研修を行います。12月は図書館の役割などについて学んでいく予定です。

本好きで、読書意欲のある小中学生が**子ども司書**となり、友達や家族に読書の楽しさや大切さを広めていってくれればと思います。

◆祝日開館しています

図書館は祝日も開館しています。月曜は休館ですが、月曜が祝日の場合は開館しています。

Pick Up

シルバー・オクトパシー

五條瑛 著

韓国の実業家から、脱北者の女性を、日本に入国後安全な国へ出国させる依頼が届く。個性的な8人の男女、揉め事解決のプロ達の腕前を拝見！

お弁当を作ったら

竹下和男 著

小学校で始まった「弁当の日」から、作られたショート・ストーリー。「料理とは、食材の命に自分の命を和えること」食べ物で人と人は繋がる。

比べずにはいられない症候群

香山リカ 著

「うらやましい」という気持ちが過ぎると、比べあい地獄にハマる。その状況から脱出し、前向きに生きるヒントが、楽しいイラスト付きで満載。

吉井勇記念館だより

特別展　吉井勇と京都～今も生きる勇の叙情～

祇園の甘美な世界を詠んだ吉井勇。彼が若い頃、初めて京都を訪れた時から、晩年終の住処とするまで、京都を題材とした短歌を数多く残しています。さらに、短歌にとどまらず、『都をどり』の歌詞を作詞したり、宮中歌会始の選者に選ばれるなど活躍しました。

本展示会では、ゆかりの地・京都での作品や資料を展示し、勇と京都の関わりをご紹介します。

【期間】9月4日（木）～12月1日（月）

【協力】祇園甲部組合

▲舞妓と京都の歌碑の前に立つ吉井勇

吉井勇作品紹介　～夏～

あでやかに君がつかへる扇より
祇園月夜となりにけらしな

〔解説〕

ある夏の夜、祇園で遊び飽きた勇たちは舞妓たちに誘われて清水寺まで行くことになった。清水の舞台から眺めた祇園は宵闇の底にあったが、舞妓が扇をあおいだ瞬間、雲が晴れて月が現れたという。その情景を詠んだ歌である。

9月3日（水）は、展示替えのため休館します。

■問い合わせ先　吉井勇記念館　☎58・2220